東洋史学研究室

～アジア・アフリカの歴史を学ぶ～

1. 東洋史学研究室紹介
2. 教員紹介
3. ゼミ・講義案内
4. 履修の手引き
5. 留学体験記

1. 東洋史学研究室紹介

はじめに、東洋史学研究室で学ぶ意義や具体的に学ぶことができる内容・対象とする領域などを紹介します。

＊東洋史学研究室概要（2025 年度）

教員 6 名、教務補佐員 1 名

学部生 21 名

大学院生 27 名（修士課程 13 名、博士課程 14 名）

○東洋史学研究室での学び（東洋史学研究室 HP より）

１．東洋史学の魅力

東洋史学（アジア史）のおもしろさ、それはアジア社会がもつヴァイタリティー、それと表裏の急激な社会変化、そして今後の世界を変えていく可能性にある。アジアの魅力は、アジア社会に一歩でも足を踏み込んだ経験をもつ者であればすぐに感ずるであろう。喧騒と色彩と匂いのあふれる街路、水と光と草原と雪と日差しの極限から極限までのスペクトル、伝統と現代との整理のつかない混雑…。そのいずれもが、人をアジア社会に引き寄せ、好奇心をあおり、不安感を増幅させ、そして知的冒険心を掻き立てるのだ。

東洋史学が対象とするこのようなアジア社会は、落ち着き安定したヨーロッパ社会とは異質なものである。したがって、その社会へのアプローチも定まったものがあるわけではない。たとえば、後に個別に紹介するように、佐川教授は都城の遺跡を中心に中国各地や韓国で調査を行っている。吉澤教授は、沿海部都市と内陸とのギャップから中国全体を見渡している。また、島田准教授はインドのスーラトや東南アジアのジャカルタなど、かつての国際貿易都市を調査し、南・東南アジアと世界がどのように結び付いていたのかを考察する。守川准教授は、西アジアや中央アジアの聖者廟や墓地を中心に、宗教と社会の関係を捉え直そうとする。これらのフィールドに、スタッフはしばしば足を運び、場合によっては学生が同行する場合もある。つまり東洋史学研究室のスタッフも学生も、まずアジア社会の中に入り、体験を積み、アジアを見る目を養っていくという方法の重要性を、認識しているのである。

もちろん東京大学東洋史学研究室が研究対象としているのは、激しい変化の中にある現代のアジアだけではない。そこには、「史記の世界」から「コーランの世界」にいたるまで、多様な文明世界の、古代から現代にいたる歴史が含まれている。東アジア文明の担い手となった中国・朝鮮、いくつもの騎馬民族国家が興亡した内陸アジア、仏教・ヒンドゥー・イスラーム文化が入り組む南アジア・東南アジア、そして古代オリエント文明とイスラーム文明が交錯する西アジア、さらに地中海・イスラーム文明と緊密な交渉を保ってきた北アフリカ・イベリア半島…。これらの地域は約五千年にわたる長い歴史を持ち、膨大な人口と広大な領域を有している。この地域に生きる人々の生活と文化を知ることなしには、世界を理解することはできないはずである。

近代以降の歴史学は、「西洋」＝ヨーロッパを中心にして歴史の理論を組みたて、世界史の展開を理解しようとしてきた。実際、上述の多様な地域を「オリエント」ないし「東方」として一括しようとする発想自体、ヨーロッパ社会の自己認識と表裏をなす西洋起源の考え方である。その意味では、「東洋史学」という枠組みは自明のものではない。「ヨーロッパの眼」でアジアの歴史を見ることは、単にヨーロッパのアジア観をゆがめてきただけではなく、アジアのアジア観をも歪めてきた。そうした見方に、大きな疑問を突きつけてきているのが近年非常に盛んになってきたグローバル・ヒストリーの潮流であるが、同じく東洋史学研究室もそうした見方に安住していない。

では、どのような方法と態度がアジア研究、とりわけ東洋史学研究に必要なのだろうか。そこには、安心して頼れるような確立した「東洋史学研究の方法」があるわけではない。むしろ、それぞれの研究者がそれぞれの方法を模索しながら個性豊かな歴史社会と取り組んでいるところに、現在の東洋史学の面白さがあるともいえよう。しかし、東京大学東洋史学研究室には、長年の伝統が築き上げてきたいくつかの重要な特色がある。

第一は、方法的・理論的関心の強さである。本研究室の歴代の教員は、さまざまな隣接学問分野の成果を積極的に吸収し、自らの方法視角を明示し、相互の批判をも含めて、学界の方法論争のなかで重要な一翼を担ってきた。したがって、本学科に進学する学生にも、方法や理論への強い関心をもつことが要求されるであろう。

第二は、「史料を正確に、厳密に読む」という実証的研究態度である。つまり先人の研究に安易によりかからず、史料と直接に接しつつ、研究方法の妥当性を常に吟味していくという態度が不可欠なのである。そのために中国語・朝鮮語・ベトナム語・インドネシア語など東南アジア諸語、ヒンディー語・タミル語など南アジア諸語、アラビア語・ペルシア語・トルコ語など西アジア・中央アジア諸語などを、習得することが推奨される。ヨーロッパ人の旅行記・伝記・報告書や過去の研究を批判的に利用するために、英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語などの読解力も必要となろう。教養学部や文学部には、これらの言語を習得する授業が設けられているので、各人の興味にしたがって必要な言語を学ぶことができる。

第三は、研究対象にタブーを設けていないという点である。歴史学にはふさわしくないと勝手に思い込まれてきた、たとえば絵画・服飾・音楽・料理のようなテーマであっても、それを研究対象として選ぶのを妨げることはない。また、「人と物と思想の東西交流」やアフリカ・オセアニアの歴史も東洋史の研究対象となる。現スタッフでは対応できない場合には、そのテーマにふさわしい研究者を紹介できる力量とつながりを東洋史学研究室は有している。

２．卒業論文について

東洋史学研究室では卒業論文の作成が重視される。それは学生時代に全力を傾けて一つのテーマを追究した体験が、その後の人生に必要であり、かつ役立つと考えるからである。東洋史学研究室の教育の目的は、必ずしも東洋史に関する広い知識を集積することのみにあるのではない。むしろ歴史的情報にじかに接して、自分のものの見方を自力で練り上げてゆく、そうした知的態度・知的誠実さを身につけることが重要なのだ。他人から与えられた器をそのまま使うのでなく、

自分で鉱石を掘り出し、自分の工夫した方法で精錬し、鋳造していこう。その結果できた器がたとえ先人のものより不格好であっても、その体験はきっと貴重な感動を与えてくれるにちがいない。そして東洋史学研究室はそうした態度を高く評価する。

東洋史で卒業論文を書くのは難しいと思うかもしれない。しかし、論文の評価の基準は単純である。自分で生の情報に接し、そこから得られた観察を明晰な言葉で論理的にまとめているかどうか、という点が問われるだけである。真摯に取り組めば、必ず評価される。

３．卒業生の進路

東洋史学研究室の卒業生は、毎年数人が大学院へ進学し、他の多くが企業に就職している。 就職先は多様で、大手製造業、銀行などのほか、出版・マスコミ関係もある。公務員を目指すものも少なくない。

４．おわりに

東洋史学研究室に進学してくる学生諸君は、講義や演習、先輩や同級生との討論などを通じ、歴史学には様々な方法があり、様々なものの見方があるのだ、ということに実感をもって気づいてほしい。対象地域を深く研究することは、同時に自分のものの見方を確立していく過程でもある。多様な視角、多様な方法相互の対話を楽しみつつ、新鮮な感覚とたくましい意欲をもって、自分の個性的なアプローチを追求されることを期待したい。

また学部時代は、受け身の学習から抜け出し、研究上で自らの問題を見つけだすとともに、これからの長い人生についての重要な選択を迫られる大切な時期でもある。コーチ役・助言者としての教授や助教、先輩や同級生の集まる研究室での率直な交流は、お互いに大きな刺激をもたらすであろう。研究室にはアジア各地からの留学生も少なくない。本郷への進学後は、積極的に研究室に顔をだし、ここを新しい学生生活の拠点としてほしい。

○過去3年の卒業論文のテーマ

2022年度

・19世紀中葉ギーラーンにおけるイラン=ロシア貿易
・鉄道から見る植民地期台湾
・『塩鉄論』の経済論争―均輸・平準の位置付けをめぐって―
・1960年代アメリカにおける中華人民共和国・中華民国に関する報道傾向―The New York Timesを事例として―
・梁武帝の中原回復意図―540 年代梁朝の通交関係を手がかりとして
・内務府正白旗人英和と清朝皇帝
・嘉慶帝期における清緬関係について

2023年度

・1950年代中国における国防戦略と核開発
・『新唐書』における大衍暦の歩月離術と『旧唐書』の記述との差異について
・秦漢初における治獄制度研究―「奏讞書」「爲獄等狀四種」を中心に―
・ムガル皇帝の庭園：庭園空間の多様性と異文化融合
・最後の十字軍戦士フェリックス・ファーベル：15世紀後半の聖土巡礼をめぐる十字軍の断絶と継承
・植民地期ビルマにおける寺院と社会
・日本統治期台湾の酒とその専売制
・19世紀前半の西アフリカ内陸社会と「奴隷」―ヨーロッパ人探検家によるその表象に注目して―
・「苻堅以後」の国家と正統性：後秦、後涼の分析を中心に

2024年度

・日本統治下台湾における感染症とその対策
・明朝前期の北京における首都機能の形成
・厳如熤『三省辺防備覧』に関する一考察
・第二次世界大戦後の横浜華僑華人社会における対立と共生

※卒業論文の書き方については、ホームページ（http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~toyoshi/index.html）内にて、東アジア史、東南アジア史、南アジア史、西アジア史・中央アジア史それぞれの場合を解説しています。一例としてぜひ参照してみてください。

○東洋史学研究室の年間行事・研究室の様子

東洋史学研究室では、通常毎年4月に、進学直後の3年生を対象とした合宿がおこなわれます（2025年度は日帰りの形で高崎・富岡にて開催）。合宿には教員全員と2～3名程度の4年生も参加します。3年生が合宿において自分が関心を持っているテーマについて発表し、それに対して教員がアドバイスします。合宿は、研究室に溶け込み、同級生や先輩との親睦を深めるよいきっかけになるでしょう。

卒業論文の執筆に向けては、ゼミ内での研究指導のほかに、毎年6月末または7月上旬に教員

との卒論相談会が実施されています。

東洋史学研究室の隣接する東洋史学談話室には、学部生・大学院生が集い、議論を交わしたり、情報を交換したりする交流の場になっています。学部生が大学院ゼミに参加したり、大学院生が学部ゼミに参加したりすることも多いです。このため、総じて東洋史学研究室では学部生同士のつながりが強く、また学部生と大学院生の間の垣根は低いといえるでしょう。非常にアットホームな雰囲気の研究室です。

2. 教員紹介

ここでは東洋史学研究室に所属する教員を紹介します。現在、東洋史学研究室には6名の教員が所属しています（うち一人は兼担）。

六反田豊　教授（韓国朝鮮文化研究専攻と兼担）

朝鮮中世・近世史を専門とする。これまで朝鮮時代の水運史や財政史・経済史を中心に研究してきた。また10年ほど前から朝鮮時代の海事史研究にも従事しており、朝鮮時代後期を対象に、済州島民の漂流・漂着問題や地方官府の海防体制などについての論考を発表している。最近ではさらにそこから発展して、海や河川などの「水環境」と人間・社会とのかかわりに着目するようになり、共同研究を組織して、漢江流域を主要な対象地として現地調査を進めている。ほかに朝鮮時代の古文書研究や朝鮮時代の国家論・社会論なども手がけている。

最近の著書に、『韓国・朝鮮史への新たな視座―歴史・社会・言説』（共著、勉誠出版、2017年）、『朝鮮史１　(先史～朝鮮王朝)』（共著、山川出版社、2017年）などがあり、また論考に「朝鮮前近代史研究と「海」―韓国学界の動向と「海洋史」を中心として」（『朝鮮史研究会論文集』51、2013年）、「朝鮮初期三浦倭料の調達方式と財源」(『年報朝鮮学』20、2017年)、「朝鮮初期の財政制度と鄭道伝」（『韓国朝鮮の文化と社会』17、2018年）、「朝鮮時代の国家財政と経済変動」（荒川正晴ほか編『東アジアと東南アジアの近世 一五～一八世紀（岩波講座世界歴史12）』岩波書店、2022年）、などがある。

佐川英治　教授

秦漢史、魏晋南北朝史、隋唐史の研究をしている。近年では、唐の長安城や日本の藤原京・平城京にいたる東アジアの都市プランの系譜の解明、出土木簡資料や碑文などを用いた社会史や軍事史の研究にも取り組んでいる。

著書に『中国古代都城の設計と思想』（勉誠出版、2016 年）、『378 年　失われた古代帝国の秩序』（山川出版社、2018年、共著）、『中国と東部ユーラシアの歴史』（放送大学出版、2020年、共著）、『ビジュアル大図鑑　中国の歴史』（東京書籍、2022年、監修）などがある。

吉澤誠一郎　教授

19世紀から20世紀前半の中国政治社会史を専門としている。近代都市社会の形成を民衆運動、ナショナリズムなどの問題と関連づけながら描き出している。最近では、中国の沿海部と内陸部

との経済格差の歴史的起源、中国における近代史学の形成、中国近代思想における特殊志向と普遍志向といった領域にも関心を拡げている。

主著として、『天津の近代――清末都市における政治文化と社会統合』(名古屋大学出版会、2002年)、『愛国主義の創成――ナショナリズムから近代中国をみる』(岩波書店、2003 年)、『愛国とボイコット――近代中国の地域的文脈と対日関係』(名古屋大学出版会、2021 年)がある。

島田竜登　准教授

東南アジア史・南アジア史を担当している。専門は特に 16 世紀以降の海域アジア地域の経済史・貿易史・都市史である。オランダ東インド会社文書を主軸に各種言語の史料を組み合わせることで、多面的な歴史像を描き出すことに関心がある。目下の研究テーマは、バタヴィア(ジャカルタ)都市史、アユッタヤー貿易史、アジア域内貿易史、オランダ東インド会社史、日本・アジア関係史、異文化交流史などであるが、歴史学の方法論やグローバル・ヒストリーに関しても積極的に発言している。

主著 *The Intra-Asian Trade in Japanese Copper by the Dutch East India Company during the Eighteenth Century* (Leiden and Boston: Brill Academic Publishers, 2006)のほか、共著『グローバル経済史』(放送大学教育振興会、2018 年)、編著『1683 年 近世世界の変容』『1789 年 自由を求める時代』(いずれも山川出版社、2018 年)、共編著『アジア経済史研究入門』(名古屋大学出版会、2015 年)、『歴史に刻印されたメガシティ』(東京大学出版会、2016 年)、『構造化される世界:14～19 世紀』岩波講座世界歴史第 11 巻(岩波書店、2022 年)、*Connecting the Indian Ocean World: Across Sea and Land,* London and New York: Routledge, 2023 など日本語・英語による多数の論考がある。

守川知子　准教授

前近代および近代の西アジア史、特にイラクのシーア派聖地への巡礼や、ペルシア語の歴史叙述・学術史、文化交流といった社会史や文化史を専門としている。イスラームに限定されない西アジアの多様な宗教・言語環境に関心を持ち、近年では、西アジアの都市社会や、宗教マイノリティのアルメニア人商人の研究を行っている。

主著に、『シーア派聖地参詣の研究』(京都大学学術出版会、2007 年)、編著に『移動と交流の近世アジア史』(北海道大学出版会、2016 年)、『都市からひもとく西アジア――歴史・社会・文化』(アジア遊学 264)勉誠出版、2021 年)などがある。

上出徳太郎　助教

中国近世・近代の財政史と新疆史を専門とする。広大で多様性も高い中国という空間を財政的に一つにまとめる構造に関心を持ち、特に新疆財政や中国内地から新疆への財政支援の実態の解明を行ってきた。最近では中国内地・外国との交易や財政活動が新疆の地域社会に与えた影響に関心を持って研究を進めている。

論考としては、「清末西北動乱の鎮圧過程における協餉」(『東洋学報』98-2、2016 年)、「新疆建省前後における協餉の変遷―甘粛新餉に注目して―」(『東方学』135、2018 年)がある。

3. ゼミ・講義案内

ここでは東洋史学研究室で開講されている講義および演習（いわゆるゼミ）の紹介をします。2025 年度は、以下の講義が開講されています。東洋史学研究室所属の教員による講義のほか、毎年他大学から 2~3 名の非常勤講師の先生によって講義がおこなわれます。

○学部講義一覧（2025 年度）

教員名	授業科目名	講義題目	時限	教室
佐川英治	東洋史学特殊講義Ⅰ	中国古代の皇帝と祭祀	S1+S2・火3	314
	東洋史学演習Ⅰ・Ⅱ	中国古代史演習Ⅰ・Ⅱ	S1+S2/A1+A2・火4	法文1 号館1416
吉澤誠一郎 島田竜登	東洋史学研究入門	東洋史学研究入門	A1+A2・月2	駒場
吉澤誠一郎	東洋史学特殊講義Ⅶ	中国近代社会史の論点	S1+S2・木1	113
	東洋史学演習Ⅸ	清代漢文史料演習	S1+S2・金4	217
	東洋史学演習Ⅹ	中国近代史料演習	A1+A2・金4	217
守川知子	東洋史学特殊講義Ⅱ	聖地巡礼にみる西アジア史	S1+S2・月2	113
	東洋史学演習Ⅲ・Ⅳ	西アジア史・中央アジア史演習（1）・（2）	S1+S2/A1+A2・火2	法文2 号館2207
島田竜登	東洋史学特殊講義Ⅲ	近世日本と南・東南アジア	A1+A2・月4	1 番大教室
	東洋史学演習Ⅴ・Ⅵ	南アジア史・東南アジア史演習（1）・（2）	S1＋S2・月3/ A1+A2・水2	法文1 号館1424
六反田豊	東洋史学特殊講義Ⅳ	朝鮮時代史論	S1+S2・金2	3 番大教室
	東洋史学特殊講義Ⅴ	朝鮮前期漕運研究	A1+A2・金2	3 番大教室
	東洋史学演習Ⅶ・Ⅷ	朝鮮時代史演習（1）・（2）	S1+S2/A1+A2・金3	赤門総合研究棟723
古松崇志	東洋史学特殊講義Ⅵ	契丹史の研究	A2・集中	
五十嵐大介	東洋史学特殊講義Ⅷ	中世アラブ史研究	A1＋A2・木4	1 番大教室
柿崎一郎	東洋史学特殊講義 Ⅸ	タイ史概論	S1＋S2・水5	113

○演習とは何か

演習（いわゆるゼミ）は、3 年次・4 年次にそれぞれ必ず通年で単位を修得する必要があります。演習は、東洋史学の研究のための手法を具体的に学び、実践していく場です。多くの演習では、主に研究文献の講読、史料講読、研究報告と論文指導がおこなわれています。**史料講読**では、研究の材料となる史料をどのように読み解いていくかを学びます。**研究文献講読**では、研究書や研究論文の内容や構成の分析を通じて、具体的な研究上の論点を学びつつ、どのような論文の書き方があるのかといったことを身につけることができます。**研究報告・論文指導**では、卒業論文の執筆・完成に向けて、各自の研究内容を報告し、参加者で議論し、内容の修正や今後の研究の方向などについてアドバイスを受けることになります。

○演習案内

朝鮮時代史演習（1）・（2）（六反田豊教授）

ゼミの内容

基本は朝鮮時代の文献史料の講読を行っています。本年度扱っている史料は『朝鮮王朝実録』のうち第 9 代国王成宗の治績を記した『成宗実録』です。漢文で書かれた史料ですので、発表の

際には原文の訓読・現代語訳・語釈が必要とされます。
　その他、学部4年生の場合は、夏学期と秋学期にそれぞれ1回程度の卒業論文の構想発表の機会があります。

ゼミのための準備
　高校卒業程度の漢文の読解能力および初級程度の韓国朝鮮語の読解能力が求められます。

ゼミで求められる姿勢
　疑問に思ったことは細かいことでも積極的に質問すること、そして、史料が書かれた背景についても考えてみることが望まれます。

その他
　ゼミは大学院と共通でおこなわれているため、大学院生も受講しており、また、他学部生も参加しているため、様々な角度からの議論が活発に行われています。

中国古代史演習I・II（佐川英治教授）

ゼミの内容
　漢～唐代を主とする漢文史料講読あるいは当該時代に関連する研究の討議が行われています。１回の授業は 50 分ずつくらいの前半と後半に分け、前半では正史や木簡・碑文などの漢文史料を精読します。後半では受講者それぞれが関心をもつ研究テーマに沿って先行研究を調べ、課題を発見し、史料を探していくという歴史研究の実践を行います。

ゼミのための準備
　工具書やデータベースを用いた史料読解の予習、研究テーマに関する先行研究の調査などが必要です。

ゼミで求められる姿勢
　歴史に対する探究心と一字一字でも辞書を引きながら史料を丁寧に読むまじめさ。

清代漢文史料演習・中国近代史料演習（吉澤誠一郎教授）

ゼミの内容
　基本は夏学期に清代の漢文史料、秋学期に民国時期の中国語史料の講読を行っています。先生が順に指名し、現代中国語による音読（or 漢文訓読）の後、解釈を述べ、内容を議論します。一学期の中で、指定された論文（日本語が多いが、中国語の場合もある）についての議論を行うことが数回あり、その際は、学生が順にコメントや疑問点を述べ、先生がそれに答える形で議論が行われています。卒業論文の構想を報告する機会は学期に1回程度あります。

ゼミのための準備
　史料講読のための予習。最低限、音読・解釈のための予習が求められ、『大漢和辞典』といった工具書類を利用することが必要になります。

ゼミで求められる姿勢
　議論への積極的な参加が望まれるので、毎回の予習を欠かさず、わからない事項についてはな

るべく事前に自分で調べておくことが必要です。

その他

中国語を第二外国語として選択していない場合は、できるだけ早いうちに基本的な文法事項を学び、発音なども練習をしておくことが望ましいです。ゼミ内で卒業論文の構想を報告する機会は少ないですが、先生には卒業論文に関する相談に快く応じていただけます。先生との相談も踏まえて、自分で計画を立てて執筆を進めていくことが重要です。

西アジア史・中央アジア史演習（1）・（2）（守川知子准教授）

ゼミの内容

基本的には、毎回参加者の一人が担当となって、自身の関心に沿って選択した研究論文や史料の講読が行われています。秋学期には、4 年生の卒業論文指導も行われます。

ゼミのための準備

学期毎に 1～2 度、自分の担当する回があるので、関心のある研究論文や史料を選択することが必要です。発表の前週には、選択した論文をゼミ参加者に配布します。ゼミ内での報告のために、論文や史料の内容をまとめたレジュメを用意することが必要になります。

ゼミで求められる姿勢

他の参加者が担当する回でも、講読対象の論文を参加者全員が読んでくることが前提となっています。また、毎週のゼミ内で、一度は発言することが求められます。

南アジア史・東南アジア史演習（1）・（2）（島田竜登准教授）

ゼミの内容

3 年生は自分の関心に沿った研究論文の講読、4 年生は自身の卒業論文についての研究報告が中心となります。年度によっては、論文集や研究書の輪読が実施されます。

ゼミのための準備

自分が関心を持っているテーマの先行研究を把握しておくこと、他のゼミ参加者が講読する論文を事前に読んでおくこと、自分の研究報告に向けた史料探しやこれまでの自身の研究内容をまとめることが必要です。

ゼミで求められる姿勢

特別な事情がない限りは必ず出席し、討議の際には積極的に意見や質問をすることが求められます。

その他

南・東南アジアを主な研究対象としたゼミですが、江戸時代における日本の外交から、アジア内におけるヨーロッパ人の貿易など、テーマについては多様な選択肢があります。

4. 履修の手引き

東洋史学研究室への進学にあたり、進学内定後の 2 年次の A1・A2 セメスターから後期課程の単位修得が可能になります。3 年次の終わりから 4 年次にかけては就職活動や卒業論文の執筆があり、想像する以上に多忙なスケジュールを送ることになる人も多いでしょう。ですから、早め早めに必要な単位は修得することを推奨します。

卒業要件

文学部を卒業するためには、東洋史学専修課程が定める必修科目 48 単位を含めて 76 単位以上を修得することが必要です。

必修科目（48 単位）

文学部の各専修課程では、必修科目が定められています。東洋史学専修課程の必修科目は、次の 48 単位です（括弧内が必要単位数）。

史学概論 (2)、東洋史学研究入門（2）、東洋史学特殊講義 (16)、日本史学特殊講義 (4)、西洋史学特殊講義 (4)、東洋史学演習 (8)、卒業論文（卒業論文の指導を含む）(12)

このうち、「史学概論」と「東洋史学研究入門」は、毎年 A1+A2 セメスターに駒場でのみ開講されるため、2 年次に必ず修得しておいた方がよいでしょう。

また、前記の学部講義一覧に示されているもののほかに、以下の講義も「東洋史学特殊講義」の単位として認定されています。

2025 年度「東洋史学特殊講義」認定科目

「中国思想文化史概説II」、「中国思想文化学特殊講義 I」、「中国思想文化学特殊講義III」、「インド哲学仏教学演習III」、「イスラム学特殊講義I」、「考古学特殊講義XI」、「宗教学宗教史学特殊講義VII」、「印度語学概論I」、「印度語学印度文学特殊講義III」、「韓国朝鮮文化特殊講義III」、「韓国朝鮮文化特殊講義IV」、「文化交流特殊講義 I」

※詳しくは文学部 HP の「文学部便覧（抜粋）」もしくは「授業科目一覧」を参照。

持ち出し専門科目について

2 年次の A1+A2 セメスターで履修できる後期課程の科目を「持ち出し専門科目」と言います。上記の駒場で開講される「史学概論」と「東洋史学研究入門」の他に、本郷では島田竜登准教授による「東洋史学特殊講義 III　近世日本と南・東南アジア」が持ち出し専門科目となっており、2 年次に受講が可能です。

語学について

文学部では、様々な言語の授業が開講されています。進学後、自分の対象とする地域、研究分野によっては、必要に応じた語学を履修するのもよいでしょう。

5. 留学体験記

東洋史学研究室では、大学院生はほぼ全員が語学や史料収集のために長期（多くの場合で 1～3 年間）に亘って海外に留学に行きます。また、近年では、全学交換留学制度などを用いて、学部生の段階で海外留学をする人も少なくありません。皆さんの中にも留学に関心がある方も多いと思います。先輩たちがどのような目的で、どのような手段で、どのような国に留学に行ったのかを知ることは、大いに皆さんの参考になるでしょう。ここでは、学部生の留学経験者の体験記を紹介します。

K さん（2021 年度進学、留学先：カリフォルニア大学デービス校、留学年次：3 年）

私は 2022 年の 1 月から 6 月まで、アメリカのカリフォルニア大学デービス校に留学していました。私自身は実のところ留学への強い希望があったわけではありませんでした。新型コロナウィルス感染症拡大により授業の殆ど全てがオンラインになり、大学に行く頻度が少なくなるなど思うように学問ができなかったもどかしさから、このままの状態で卒業してしまうのは勿体ないのではないか、なにか「学生らしい」経験がしたいという思いから唐突に留学に行こうと思い立ち、ちょうど派遣学生を募集していたカリフォルニア大学のプログラムに応募した、という経緯があります。そのため、留学先では専攻とは異なる分野を中心に学ぶことになりました。

印象的な授業としてはブロードウェイミュージカルからアメリカの現代社会を見るというものがありました。ミュージカルという大衆的な娯楽に人種差別や宗教観などのアメリカの社会意識が反映されているというのは非常に興味深く、日本にいては感じられなかった現地での社会問題への意識を考える機会になりました。結果的には専攻の事を考えずに過ごす半年になりましたが、得たものは非常に多く、留学には行ってよかったと感じています。語学力の面では日常的に英語を使うことで、英語力を上達させることができました。

また、現地の友人を多く得られたのも、留学の思い出のひとつです。私はとても内気な性格であり、新しいコミュニティで友人をつくることはとても苦手でした。しかし、思い切って現地のサークル活動に一度参加したところ、多くの趣味のあう友人を見つけることができ、彼らの一部とは留学から一年が経過した今でも頻繁にメッセージのやりとりをしています。

海外留学には、大学を長期にわたり休学する必要があることや、金銭面での負担など確かにデメリットはあります。しかし、留学を通して得た出会いや経験は何物にもかえがたい財産になります。留学に行こうか迷っている人がいれば、ぜひ勇気を出して挑戦してみてほしいと思います。

I さん（2024 年度進学、留学先：浙江大学、留学年次：3 年）

私は学部 3 年次に、東京大学の短期留学プログラム（ウィンタープログラム）に参加し、2025 年 2 月から 3 月にかけての 2 週間、中国・杭州にある浙江大学に短期留学しました。留学の目的は、中国語能力の向上と中国の大学生活を実際に体験することです。以前から留学には関心があったものの、なかなか余裕がなく参加の機会を得られずにいました。そこで、比較的参加しやすい短期のウィンタープログラムであれば気軽に挑戦できると考え、この時期の留学を選びました。留学中は、浙江大学の留学生向けの言語クラスに参加し、毎日 90 分の語学授業を 2 コマ受講しました。授業は全面的に中国語で行われ、文法や用語の解説もすべて中国語で進められるため、授業に出るだけでも非常に良い勉強となりました。それ以外の時間は、授業の予習・復習や宿題

に取り組んだり、周辺の博物館や名勝、西湖周辺を見学したり、他の学生と交流したりと、自由に過ごしました。杭州は中国史上でも重要な都市であり、滞在中には市内の歴史遺址を巡ったり、土日には足を伸ばして上海や蘇州を訪れたりと、多くの貴重な経験を得ることができました。また、浙江大学側が用意したプログラムにも参加し、博物館や歴史地区を巡ることで、中国の歴史や文化への理解を深めることができました。2 週間という限られた期間だったこともあり、中国語の語学力の向上には限りがありましたが、浙江大学の学食や図書館などの学内設備を学生として利用したり、また現地の学生や浙江大学の学生ボランティアの方々と交流を重ねたりすることで、中国の大学生活を肌で感じることができたのは大きな収穫でした。もともと大学院進学も検討していたことから、今回の短期留学は将来的な中長期留学を考える良いきっかけにもなりました。

中国・内モンゴル・ノモンハン東部の大平原

香港特別行政区　南丫島の天后廟

ボストン美術館・
隋代の観音菩薩像

韓国・水原華城の長安門

スウェーデン・ヨーテボリ市・
スウェーデン東インド会社の元の建物

イラン・
聖ステファノス教会

インド・アンベール城

インド・ジャイプル・風の宮殿

問い合わせ先

〒113-0033　東京都文京区本郷 7-3-1　法文 2 号館 1 階 2119 室

メールアドレス：toyoshi@l.u-tokyo.ac.jp

電話番号：03-5841-3781

ホームページ：http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~toyoshi/

表紙背景：イスファハーンのイマーム・モスク（旧名・王のモスク）